

たと記されています。

寛永年間といえば、若宮本（作品2）が制作された時期と重なっており、若宮八幡宮の再建を契機に又兵衛へ三十六歌仙絵の制作が依頼され、同社へ奉納されたという仮説には一定の蓋然性が認められると思います。とはいえ、荒木村光が持ち込んだとする見解（吉田1992）も捨てがたいですし、全く別の機会に若宮八幡宮へ伝わった可能性ももちろん考えられます。

いずれにせよ、関連資料に乏しい現状では明確な結論を出すことはできませんので、もう少し周辺的な情報を探りながら今後の議論に備えようと思います。

まず注目したいのが黒田一成が文芸面に深い造詣を示していた点です。『加藤家譜』や『黒田家臣伝』によると、性格は穏やかで花月景物を愛し和歌などの文学を好んだといいます。

一成が礎を築いた三奈木黒田家に伝わる家宝を列記した『御自家重宝記』には、土佐派や狩野派の絵画が収録されるほか、黒田家のお抱え絵師を務めた尾形家には一成が所蔵していた狩野探幽や安信の絵画の写しも伝わっています（尾形家絵画資料1601、2207、2504、2570、3144）。こうした事実は一成が和歌などの文学に加えて、絵画にも深い造詣を示した可能性を示唆します。

そして、現存する黒田家と関わる作品の中に、一成の関与が明確に認められるものが存在しています。それは《大坂夏の陣図屏風》（大阪城天守閣蔵）と《黒田長政像》（福岡市博物館）です。

《大坂夏の陣図屏風》は、慶長20年（1615）に行われた江戸幕府と豊臣家の間の合戦を描いたものです。元は黒田家に伝来しましたが昭和33年（1958）に大阪城天守閣へ譲られました。黒田家の記録である『御数寄道具故実』によると、この屏風は長政の命をうけた一成が絵師を吟味して選出し制作されたものといいます。

《黒田長政像》は、甲冑をまとい馬にまたがった長政の姿を表したもので、長政の死後まもない寛永元年（1624）に制作されました。画面上部には、儒学者の林道春の贊に加えて、一成の求めによる江月宗玩の贊が記されており、肖像画制作全体を差配したのが一成であった可能性もあるでしょう。

以上、わずかな事例ではありますが黒田一成が絵画を含む文芸面に深い造詣を示していたこと、藩に関わる絵画制作を指揮する立場にあったらしいことが分かりました。これをもって若宮本の制作に一成が関わったと断定することは到底できませんが、さらに傍証を積み上げていくことで、その蓋然性を高めていくことはできるかもしれません。

謎の解明にはまだまだ道半ばといったところですが、引き続き資料の発掘に努めたいと思います。

主要参考文献

太字で記したものは当館の情報コーナーで閲覧できます（一部閉架図書も含む）。それ以外は福岡市総合図書館などで閲覧できます。

- 中山喜一郎「若宮八幡宮伝来岩佐又兵衛筆『三十六歌仙絵』について」『若宮三十六歌仙絵』1989年
- 吉田喜代「岩佐又兵衛と福岡一荒木弥助村光そして三十六歌仙の謎—」『福岡地方史研究』第30号、1992年
- 宮野弘樹「福岡藩筆頭家老三奈木黒田家『御自家御重宝記』について」『福岡市博物館紀要』17号、2007年
- 辻惟雄『岩佐又兵衛—浮世絵をつくった男の謎』文藝春秋、2008年
- 『黒田長政と二十四騎 黒田武士の世界』福岡市博物館、2008年
- 『岩佐又兵衛と荒木一族』『美術史学』30号、東北大学大学院文学研究科美術史講座、2009年
- 辻惟雄・佐藤康宏 監修・編著『岩佐又兵衛全集』藝華書院、2013年
- 『別冊太陽 日本のこころ247 岩佐又兵衛 浮世絵の開祖が描いた奇想』平凡社、2017年
- 中山喜一郎（談）「天才絵師・岩佐又兵衛の魅力と謎」『エスプラナード』211号、福岡市美術館、2023年

全部見せます！ 岩佐又兵衛《三十六歌仙》

Everyone is on Display! Iwasa Matabei's Portraits of Thirty-Six Immortal Poets

会期 2023年4月11日(火)-6月25日(日)

会場 古美術企画展示室



出品No.1 岩佐又兵衛《三十六歌仙絵(旧上野家本)》柿本人麻呂(福岡市美術館蔵)



出品No.2 岩佐又兵衛《三十六歌仙絵(若宮本)》後鳥羽院(若宮八幡宮蔵、福岡市美術館寄託)

岩佐又兵衛（1578–1650）が描いた二組の三十六歌仙を紹介します。個性あふれる人物描写をお楽しみください。
(学芸員 宮田太樹)

出品リスト

※作品データは、出品番号、作品名、員数、指定、作者、時代、材質、サイズ(cm)、所蔵の順で記載しています。なお、2組とも画冊として伝来しましたが、現在は保存及び展示活用のため1面ずつを表した形状となっています。

1 三十六歌仙絵(旧上野家本) 36面

岩佐又兵衛(1578-1650)
桃山-江戸時代
紙本着色、縦21.0 横21.6(各)
福岡市美術館蔵

2 三十六歌仙絵(若宮本) 36面 宮若市指定文化財

岩佐又兵衛(1578-1650)
江戸時代
紙本着色、縦21.6 横33.1(各)
若宮八幡宮蔵(福岡市美術館寄託)

岩佐又兵衛の生涯

又兵衛は、織田信長の有力家臣であった荒木村重の子(孫という説もあり)として、天正6年(1578)に摂津国(現伊丹市)で生まれました。ですが、又兵衛が誕生したちょうどその年、村重は信長に対して謀反を起こします。村重は1年近くも抗戦しますが敗北。彼が立て籠もっていた有岡城は落城し、一族のほとんどが処刑されてしまいます。又兵衛は落城の混乱の中、乳母に抱かれて城を抜け出し、本願寺教団に逃げ込んだため、命は助かりましたが、幼くして父母と生き別れることとなってしまったのです。

その後、青年期を京都で過ごした又兵衛は、武家として仕官することをあきらめ、絵師として生きていくことを決断したようです。又兵衛は、福井へ移住する元和2年(1616)頃までは京都を拠点に活動したと思われますが、この頃に制作された作品はほとんど残っていません。旧蔵者にちなんで舟木本と呼ばれる《洛中洛外図屏風》(東京国立博物館蔵)は描かれた内容から慶長19年(1614)もしくはその翌年頃の制作と考えられており、貴重な京都時代の作例に数えることができます。また、今回展示している《三十六歌仙絵(旧上野家本)(作品1)》も、又兵衛の画業の最初期にあたる京都時代、もしくは福井移住後間もない時期の制作と考えられます。

さて、福井に移住した又兵衛は、同地の藩主であった松平忠直、忠昌の庇護のもと旺盛な制作活動を展開します。エネルギー溢れる人物たちが躍動する極彩色

の絵巻や古典的な画題に独自な解釈を加えながら多彩な技法で描いた作品など、又兵衛の代表作と呼べる作品の多くがこの時期に描かれたものです。

その後、還暦を迎えた頃に幕府の招きを受けたらしく又兵衛は江戸へ上って活動します。この頃の画風は、京都・福井時代と違って穏やかで気品あるものとなっており、《三十六歌仙絵(若宮本)(作品2)}も又兵衛が江戸に住んでいた頃の作品です。江戸では制作依頼が多く舞い込み多忙を極めたようで、慶安3年(1650)同地で亡くなりました。

三十六歌仙と岩佐又兵衛

優れた歌人のことを尊敬をこめて歌仙と呼び、その姿を詠歌とともに表した作品のことを歌仙絵といいます。宮廷文化を象徴する和歌の隆盛に伴って、平安時代に画題として確立し江戸時代に至るまで描き継がれました。伝統的な画題得意とした又兵衛は、歌仙絵も数多く描いています。

本展では、旧蔵者である上野精一氏(かつての朝日新聞社社主)にちなんで旧上野家本と呼ばれる作品(作品1)と福岡県宮若市にある若宮八幡宮が所蔵し、当館へ寄託されている若宮本(作品2)という二組の三十六歌仙絵を紹介しています。

三十六歌仙絵とは優れた三十六人の歌人をピックアップした歌仙絵のこと、作品1、2のように歌仙を左右に振り分けた歌合の形式であらわすこともあります。三十六人の構成は一定ではありませんが、藤原公任撰『三十六人撰』に依拠した人選が最も一般的です。

旧上野家本(作品1)はこの公任撰『三十六人撰』に基づくことから、画題や構成は伝統を強く意識しているといえますが、画風は伝統とはかけ離れたものとなっています。

歌仙絵は歌人に対する尊崇の気持ちを表すためのものであり、理想化された姿で描かれるのが一般的です。しかし、本作の場合は身近な人を描いたのかと想像したくなるほど、卑近で俗っぽく描かれます。歌仙の表情の描き分けは徹底されており、同じ顔はふたつとありません。加えて、極端に誇張、変形された身体表現も大きな見どころです。

画中に作者を示す落款・印章はありませんが、又兵衛の画業の最初期にあたる京都在住時代、もしくは福井移住後間もない時期の制作と考えられています。

当初は歌仙とともに詠歌も書かれていたのですが、ある時期に削り取られてしまつたため判読することは

不可能です。どのような和歌が書かれていたのか興味はつきませんが、元々の和歌を大胆にアレンジした又兵衛自作の歌が記されていた可能性が指摘されています。

若宮本(作品2)は、作品1と同じく三十六歌仙を描いたものですが、三十六人の構成は大きく異なります。『新古今和歌集』から歌人と詠歌が取られているのが特徴で、類例を探してみると、飛鳥井雅庸筆『中古三十六人歌合』(東京国立博物館蔵)、土佐光起の手によると伝わる《三十六歌仙帖》(国文学研究資料館蔵)などは、歌人の構成、配列、詠歌の内容まで一致します。

作風は頬が豊かに張って顎が長い「豊頬長頤」と呼ばれる特徴的な人物表現は若いころと共通します。ですが、旧上野家本(作品1)に見られたような誇張や変形は見られず全体にまとまりのよい穏やかで気品ある画風に仕上がっています。華やかな彩色文様や極細の金泥線など随所に技術の高さをうかがわせています。

同様の作風を示すものに、寛永17年(1640)に制作された《三十六歌仙額》(仙波東照宮蔵)があり、若宮本(作品2)も同じころ、すなわち、又兵衛が江戸へ移住した後の晩年の作品と推定できます。

ところで、又兵衛が活動拠点としたのは、京都、福井、江戸であり、福岡との縁はなさそうです。にもかかわらず、若宮八幡宮に又兵衛作品が伝來したのはどのような理由によるのでしょうか?

若宮本三十六歌仙絵の謎

若宮八幡宮に又兵衛作品が伝來した背景をめぐっては大きく分けて2つの可能性が提示されています。

1. 福岡藩を治めた黒田家の家臣・黒田一成(美作)に注目する説(中山喜一朗「若宮八幡宮伝来岩佐又兵衛筆『三十六歌仙絵』について」『若宮三十六歌仙絵』1989年)

2. 荒木一族の一人である荒木村光(満)が、福岡藩主黒田忠之、光之に仕えており、彼が持ち込んだとする説(吉田喜代「岩佐又兵衛と福岡一荒木弥助村光そして三十六歌仙の謎」『福岡地方史研究』第30号、1992年)

いずれの説も福岡藩主黒田家、もしくはその家臣と荒木一族との関係に注目する点では共通しています。荒木一族と黒田家の関わりを示す史料はいくつか存在しており、例えば、『寛政重修諸家譜』は、荒木村重の従兄弟である荒木元清の子息である石尾治一、荒木元満がいずれもある時期、黒田家初代藩主長政のもと

に身を寄せていたことを伝えています。

加えて、荒木庵(福岡県朝倉市八重津にかつて所在、現存せず)、正福寺(朝倉市)も見逃せません。『筑前国続風土記附録』卷之十九 下座郡によると、正福寺は本願寺に属する寺院で、淨念了保によって開かれたといいます。了保は、荒木村重の一族で慶長年間に筑前へ来たのを、黒田一成の庇護をうけ、荒木庵という草庵を結びました。その後、一成より新たに寺地を与えられ、正福寺を開いたそうです。

荒木家の系図に淨念了保に該当しそうな人物は見当たらぬ、その素性は不明と言わざるを得ません。正福寺が本願寺に属する寺院であることから、了保も本願寺と関わりが深い人物であったことが想像できる程度です。

そこで、視点を変えて了保を庇護した黒田一成に注目してみると、既に指摘があるとおり、黒田家と荒木一族、そして、若宮八幡宮をつなぐキーパーソン的な存在であることが分かります。

黒田家家老・黒田一成

黒田一成(1571-1656)は幼名を玉松といい、長じてからは美作とも名乗りました。父の加藤重徳は、荒木村重の家臣で村重が信長に謀反を起こした際も行動を共にしていました。この時、信長の使者として黒田孝高(官兵衛)が、説得のために村重のもとに遣わされます。ですが、説得は失敗に終わり孝高は有岡城の牢に幽閉されたのです。この間助けとなったのが重徳で、有岡城から救出された孝高はその恩に報いるため、一成に黒田姓を与え我が子同然に養育することを約束します。

その後多くの武功をあげた結果、黒田長政が慶長5年(1600)に筑前国を賜ると、一成は下座郡に一万二千石の所領を与えられ、三奈木村に屋敷を構えました。三奈木黒田家(福岡藩主黒田家と区別するためこのように呼びます)は、その後も代々加増され、筆頭家老として福岡藩でも特別な存在となっていました。一成が了保を庇護したことからもうかがえるとおり、黒田家のものと荒木一族の人びとが身を寄せたのも一成を頼ってのことではなかったかと想像されます。

若宮八幡宮に又兵衛作品が伝來した背景に一成を想定する説があることは既に紹介しました(中山1989)。その大きな根拠となっているのが、『太宰管内誌』や『筑前国続風土記拾遺』などの地誌に載る若宮八幡宮再建の記事です。すなわち、寛永年間、当時藩主であった黒田忠之が一成に命じて若宮八幡宮を再建させ